

ないし黄色の土師質で、黒斑は見られない。部位・形状・調整痕などがわかるものは六点で、主なものは次の三点である（第38図7～9）。

7は胴部、8・9は底部である。外面調整は縦刷毛が施され、内面調整は無での他に横刷毛（7）も見られる。突帯は粘土紐を貼付け、横撫でを施したもので、断面が突出度の低い台形である。8・9の場合、粘土を二重に貼付けて器壁に厚みを持たせている。底縁部には刻み目を有している。色調は赤褐色を呈する。

立会調査の採集埴輪二点は、一点を除けば全て土師質であるが、部位・形状・調整痕のわかるものは僅に六点であった。外面調整には縦刷毛（3）、横刷毛（4・5）、斜刷毛（1・2）が施されているが、ほとんどの場合、風化していてわからなくなっている。突帯は断面が突出度の高い台形（1～4）、三角形（5）、不整形（6）などに分けられる。粘土を二重に貼付けて器壁を成形しているもの（3・5）が見られる。焼成は土師質の他に、やや硬質のもの（3）があり、これは他が赤褐色あるいは黄色であるのに対し、黒褐色を呈する。

昭和五十年度外堤調査時の出土品と比較すると、外面調整、内面調整、突帯の調整・断面形、色調、黒斑の有無等の各要素において共通点が多く見られる。

（佐藤利秀）

陵墓石塔の現状記録調査

昭和五十八年三月下旬に次の三基の石塔に就て、写真撮影・銘文の採拓・観察を行った。

(1) 道寛親王墓（大津市園城寺町 三井寺中院聖護院宮墓地・第39図）



第39図 道寛親王墓

親王は後水尾天皇皇子で聖護院門跡。延宝四年（一六七六）三月八日に薨去された。墓は高さ約一五〇センチの花崗岩製の無縫塔で、塔身はやや肩の張った卵形で素弁三段葺の蓮座があり、その下には八角三段の受座を作る。八角の棹石は正面は縁どりをして銘を彫り、他の七面には中央に蓮花座を高肉にあらわしている。しかし本来の形状を失い象徴的なものとなっている。彫の深い複弁の反花が棹石をうけ、その下に二段の台座があり、下段は刳形のある八脚を作り出して八角の基礎石に据え

る。基礎石には正面とその左右に菊花紋を刻し、基壇上につけている。徳川時代前期のものではあるが、現在最も古いとされている泉涌寺の開山塔と、その構成が極めてよく似ている。

銘は磨耗が著しく棹石正面に「浄願寺二品親王道寛尊儀」とあり、隣接する左右の面には正面に寄せてそれぞれ「延宝四丙辰年」「三月八日」と薨去の年月日を刻している。

(2) 永悟親王墓（大津市園城寺町 三井寺北院円満院墓地）

親王は後西天皇皇子で円満院門跡。延宝四年（一六七六）十一月一日に薨去された。墓は高さ約一七三センチの花崗岩製の無縫塔で、塔身は肩の張りがなく円筒状で、蓮座は腰が高く素弁を二段に線刻している。その下には八角二段の受座を作る。八角の棹石は正面に銘を刻し、他の面には梵字を配している。台石は一段で複弁の反花座が棹石を受け、刳形のある八脚を作り出し、八角の基礎石に据え、基壇上につけている。基壇の周囲には石柵をめぐらせている。銘は棹石正面に

延宝四丙辰年

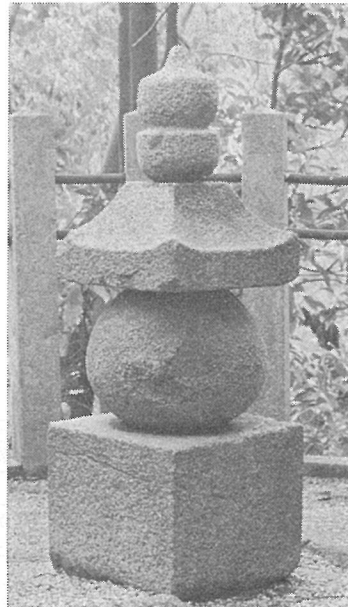
法性院長吏無品永悟親王尊儀

十一月一日

とあり、棹石の他の各面には胎藏界曼荼羅中台八葉院の種子を刻している。正面には墓銘があるため宝幢仏を示す種子を塔身の正面に刻する。

(3) 良助親王 冬野墓（奈良県高市郡明日香村大字冬野・第40図）

親王は龜山天皇皇子で青蓮院に御入室、のち天台座主となられたが、



第40図 良助親王墓

晩年は多武峯に隠棲し、文保二年（一一三二）八月十八日にこの地で薨去されたといわれる。墓は、談山神社の南方の山頂にあり、高さ約九六センチの花崗岩製の五輪塔である。空風輪は一石で空輪はやや肩が張り頂部の突起は顕著である。風輪は半円形で底は平らである。火輪はほぼ正三角形で傾斜はやや強く、軒は厚く反りがあり、反りは下の線より上の線の方が強い。水輪はやや下ぶくれで、地輪はほぼ正方形で直接地上に据えられている。銘は認められない。全体として鎌倉時代後期にふさわしい形状を具えているが、空輪の肩の張りや突起の顕著さはやや時代が下るようにも思われ、空風輪は或は後補されたものかも知れない。

（戸原純一）